

芥川龍之介

—— 問いかける小説 ——

芥川は大正十年三月末日から七月初旬にかけて、大阪毎日新聞社の海外視察員として、中国旅行の旅に出た。その折の見聞が『上海遊記』となつて「大阪毎日新聞」に八月十七日から九月十二日まで二十一回にわたつて掲載された。『上海遊記』は全二十一の短篇から構成されている。政治経済の面には深く踏み込んだ文章はない。中国の調度骨董の類い、芝居や中国美人の話題などの叙述があり、吉田精一は、多方面に「目と心をくばり、文芸の士の好事的印象にのみ終らせまいとしている配慮は感じられる、「いろいろと体裁をかえ、視点をかえ、機智と諧謔と皮肉が百出して、読んで面白く、作者の才気を十分に感じさせるに足りる」とみている。

ところで「十二 西洋」で、上海は一面西洋でもある、が、西洋の様式がよいとは限らない、西洋嫌いなのではなく「俗悪なるものはご免なのだ」と芥川はいう。ただ上海の西洋は「本場

菊 地 弘

を見ない僕の眼にも、やはり場違ひのやうな気がするのだ」と語っている。また「二十 徐家滙」では、中国の風土のなかで三つの時代におけるキリスト教のありようをスケッチ風に描いているが、先ず「明の万暦年間」、雲水と宣教師の間答形式で、どこから来たかと問う雲水に、宣教師が信者の家へ行つてきたと答えると、雲水は「黄巢過ぎて後、還つて剣を収得するや否や？」、「道へ。道へ。道はなければ、」と迫つて、「如意を揮ひ、将に宣教師を打たん」とする。僕が雲水を突き倒して、その間に宣教師は立ち去る。雲水は仏の道にはずれたやつだとのしり、「如意」まで折れてしまった、「鉢」は見失つてしまつたという。折から「墻内よりかすかに讚頌の声起る」としている。天主教が根づいていることを示しているようだ。次に「清の雍正年間」、キリスト教が禁じられ「荒廃せる礼拝堂」が見える。キリスト教者とわかれば首を斬られる。甲乙丙の三人の娘

が摘み草に来て土にまみれた十字架をみつけるが、元の通りに埋めておく。暮れ方、一人の老人が丙と現れ、早く先程の十字架をさがしてくれと願ひ、老人は手に十字架をのせ、折からの「新月の光」に照らされながら「黙禱の頭を垂る」のである。隠れキリシタンを描いているようだ。「中華民國十年」、天主堂の尖塔が雲に聳え、麦畑の中に十字架がある。日本人五人が現れ、案内記を開きつつ、十字架が徐家滙の墓の一部であることを確認し、墓誌銘や十字架の銘を読み、その前に立つて写真を撮る。その場面の「不自然なる数秒の沈黙」という表現で終っている。どうして不自然なのか明らかにしていないが、十字架の前で写真を撮る思慮のない觀光気分の不調和な気持を明示したのである。中国の文明史のなかでキリスト教がどのような役割を果たしたか、どのような受難を経てきたのか、具体的ではないが、作者芥川のはキリスト教文明と土着の固有の文明との触れ合う課題に向いているということがいえまいか。

『神神の微笑』は大正十一年一月「新小説」に発表された。

この小説は「一切支丹もの」の部類にはいるが、ある種の文明論であり日本人の精神史を描いたものと読める。宣教師オルガンティンが永祿寺、通称南蛮寺の庭を歩いているところからはじまる。松や桧という日本古来の木々の間に薔薇、橄欖、月桂といった「西洋の植物」が植えてある。夕明りのなかに漂う「薄甘い匂」が「庭の静寂」に「何か日本とは思はれない、不可思議な魅力を添へ」ている。それは日本の中に西洋が調和的に同

居している眺めであり、庭（自然）が魅力的に映ってくる光景なのだが、オルガンティンの心を安らかにほしめない。心は過去へ、遠く「羅馬の大本山」へ誘われてゆき、懐郷の悲しみを払うため「神」の御名を唱えるが、目前の風景はオルガンティンの気持に一層「重苦しい空気を擴げ」はじめた。

「この国の風景は美しい。——」
オルガンティンは反省した。

この咏嘆に沈む「反省」とは何か、キリスト教と日本の自然（風土）との間隙に立たされ、宣教師オルガンティンは布教への決心が揺らいでいるのである。彼の心中は、

「この国の風景は美しい。気候もまづ温和である。土人は、——あの黄面の小人よりも、まだしも黒ん坊がましかも知れない。しかしこれも大体の気質は、親しみ易い処がある。のみならず信徒も近頃では、何万かを数へる程になつた。現にこの首府のまん中にも、かう云ふ寺院が聳えてゐる。して見れば比処に住んでゐるのは、たとひ愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？ が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスボアの市へ帰りたい、この国を去りたいと思ふ事がある。これは懐郷の悲しみだけであらうか？ いや、自分はリスボアでなくとも、この国を去る事が出来さへすれば、どんな土地へでも行きたいと思ふ。支那でも、沙室でも、印度でも、——つまり懐郷の悲しみは、自分の憂鬱の全部ではない。

自分は唯この国から、一日も早く逃れたい気がする。しかし——しかしこの国の風景は美しい。気候もまづ温和である。……」

とあるように、日本の風土はその美しき、温和なことでオルガンテイノを魅きつけると同時に、えたいの知れない不安、憂鬱を与えるものとなつてゐる。風土の〈不可思議な美を象徴的に表わしているのが〈灰白い桜の花〉即ち〈夕闇に咲いた枝垂桜〉で、その靡げな美の光は彼を〈不安〉にかきたてるとともに、〈日本そのもののやうに見えてくるのである。南蛮寺内陣で神へ祈を捧げるオルガンテイノに、ランプの光に照らし出される〈勇ましい天使は勿論、吼り立つた悪魔さへも、今夜は靡げな光の加減か、妙にふだんよりは優美に見える。それは〈水らしい薔薇や金雀花が、匂つてゐるせゐかも知れない〉と観じる。風景が美しいと嘆じたと同じようにこの内陣の内でも自身情調的な感覚に立ち、悩まされてゐる。花の美しき、漂う匂いが人の心に刻むこの国独特な風土を、異国人に知らしめるように作者芥川は造型してゐるようによめる。キリスト教を弘めるためには独特の風土との戦いがまずおこなわれなくてはならない。

この日本に住んでゐる内に、私はおひおひ私の使命が、どの位難いかを知り始めました。この国には山にも森にも、或は家の並んだ町にも、何か不思議な力が潜んで居ります。(中略)その力は、丁度地下の泉のやうに、この国全体

へ行き渡つて居ります。まづこの力を破らなければ、おぼ、南無大慈大悲の泥鳥須如来！ 邪宗に惑溺した日本人は波羅韋増(天界)の莊嚴を拜する事も、永久にないかも知れません。私はその為この何日か、煩悶に煩悶を重ねて参りました。どうかあなたの下部、オルガンテイノに、勇氣と忍耐とを御授け下さい。——」

と、オルガンテイノは既に日本人には天国を拜せないかも知れないがとにかく布教に努めようという悲願に近い姿となつてゐる。異文化キリスト教と土俗信仰との衝突葛藤である。

オルガンテイノはキリスト教を弘める使命を果すためには〈この国の山川に潜んでゐる力〉即ち神神の靈と〈戦はなければならぬ〉ことを思う。そのオルガンテイノの眼前に天の岩屋戸の「神話」が出現し、〈新しい神なぞは〉いない、〈大日靈貴〉に逆らうものは亡びると、〈大日靈貴〉を始祖とする神神の国であることが強調されている。だがオルガンテイノは今日一日の内に〈日本の侍が三四人、奉教人の列〉に加わつた事実を思い、やがて〈この国も至る所に、天主の御寺が建てられる〉ことを信じる。そこへ〈この国の靈の一人〉である老人が現れ、オルガンテイノに向つて、

「あなたは天主教を弘めて来ますね、——」
老人は静かに話し出した。

「それも悪い事ではないかも知れません。しかし泥鳥須もこの国へ来ては、きつと最後には負けてしまひますよ。」

この予言の意味は大きい。キリスト教文化の根付かないことを明らかにしているからである。それは、夢のように花を煙らせている枝垂桜の美に象徴されるこの国では、キリスト教という一神教の聖なるヴィジョンは生じてこないことを示すからである。換言すれば、神神の微笑がこの日本人の心びとの感性に伝えて来る恍惚と咏嘆のなかでキリストの思想は中核的なテーマとして成り立ち難いことを説いているのである。輸入された外来文化の真髄を失った形で根付いた例として、中国から伝わった文字や書道があげられるが、それらは日本人の心情に見合う形にデフォルメされて、美しく生れ変わったという。また仏教の運命も同様であるという。大日靈貴は大日如来と同じものだと思はせ、たへ本地垂跡の教へが支配的なのであるとしている。だからオルガンテイノが三四人の侍が帰依したと言うのに対し、

「それは何人でも帰依するでせう。唯帰依したと云ふ事だけならば、この国の土人は大部分悉達多の教へに帰依してゐます。しかし我我の力と云ふのは、破壊する力ではありません。造り変へる力なのです。」

というように、神仏が矛盾撞着することなく身体と精神のうちと同居していることを明らかにしている。同時に日本人の「力」は「破壊」するのではなく「造り変へる」力であると、日本人の特性を捉えている。つまり民族的な宗教（汎神）の中に外来の文明を「造り変へ」えて組み込んでしまう寛容な精神を強調す

るものである。一神教の「キリスト教の持つ非寛容」^(注4)の厳格な精神との差違を明言するものともいえよう。

「事によると泥鳥須自身も、此の国の土人に変るでせう。支那や印度も変つたのです。西洋も変らなければなりません。我我は木木の中にもゐます。浅い水の流れにもゐます。薔薇の花を渡る風にもゐます。寺の壁に残る夕明りにもゐます。何処にでも、又何時でもゐます。御気をつけなさい。御気をつけなさい。……」

という。キリスト教は東洋的汎神論のうちに「混合」されてしまふだろうとしているわけだ。

初出稿では次のような風景が描かれている。オルガンテイノは南蛮寺の方丈のへたつた一つともつた蠟燭の光も、其処へはかすかにしか当らなかつた。窓の外の木立ちの戦ぎ、彼の翻す頁の音、——彼を取り囲んだ静かさは、殆息苦しい位だつた」という情態のなかで、先程の老人の姿が浮びあがつてくるのを感じている。壁面の、真向になつた耶穌の後に齧金桜が咲いているではないか、のみならず耶穌その人の顔も、頭をめぐつた円光の中に、何か表情が變つたように見えた。ペテロの顔は先程の老人によく似ているように見える。オルガンテイノの、お前は一体何ものだと言ふことばに、耶穌は「彼は我影、我は彼が光なり。」と、その土着の靈である老人と一体になつたかのような答えを与える。

ペテロ「主よ。如何にして自らを我等には顕し、世には

頭し給はざるや？」

耶蘇「人もし我を愛さば、我言葉を守らん。我來りてその人と共に住むべし。(中略)」

ペテロ「主よ。何処へ行き給ふや？」

耶蘇「我行く所へは汝今従ふ事能はず。されど心に憂ふる事勿れ。我行くは汝等をも、我居る所に居らしめんとてなり。少時せば世は我を見る事なし。されど汝等は我を見る。我生くれば汝等も生きん。汝等安かれ。」

と、新約聖書、ヨハネ伝第十三章、第十四章の言葉を拾つて綴つた對話があつて(ただしこの引用最初のペテロの言葉は、ペテロのものではなく、スカリオテでない方のユダがキリストに問ひかけた言葉である。菊地)、

十二人の弟子たち「主よ。大日靈貴よ。我等主と共にあらん。……」

この言葉がまだ止まない内に、蠟燭は火の尾を引きながら、オルガンテイノの手を離れた。彼はその利那に耶蘇の顔が、美しい女に變つてゐるのを見た。「ホザナよ。ホザナよ。大日靈貴の名によりて来るものは幸なり。いと高き所にホザナよ。」

と、闇の中の関の声となつてきこえてくるという。キリストが、この国へ来て、大日靈貴に變容することを、明らかにここで描いている。この部分は『春服』収録の際に削除された。

遠藤周作氏は「この造りかえる力という点は重要である。芥

川はそれを肯定したのか、それとも否定したのか。少くともそれはこの「神々の微笑」のなかでは曖昧だ」と記している。しかしそれは初出で読めば、〈造り変へる力を芥川は肯定していることになる。日本の風土にキリストの真髓はストリートには定着しないことを断じるものである。しかし、作品末尾では

泥鳥須が勝つか、大日靈貴が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与ふべき問題である。

と未定のこととして描いているので、この初出の部分があつては内容が矛盾する。つまり構想の破綻が窺われる。それに気づいた芥川が先の部分を『春服』に収録する折に削除したのであろう。

さて〈我々の事業〉とは何を指すのか。それは〈新たに水平へ現れた、我々の黒船の石火矢の音は、必古めかしい君等の夢を破る時があるに違ひない。それまでは、——さやうなら。パアドレ・オルガンテイノ！ さやうなら。南蛮寺のウルガン伴天連！〉の一文と関連づけければ、西洋の新文明(事業)がもたらす衝撃を見据えているということである。三好行雄氏は「我々の事業」はすなわち西洋の事業にほかならない。」と述べている。〈破壊する力〉をもつキリスト教は、山川草木に神があると認識するこの国では変容させられてしまうことが、この小説の主題であつた。それは近代的人間中心主義に立つ認識によつて思考する西欧と日本との関与性を問題化しているという

ことにもなっている。

既に日本近代を知っている芥川は異文化西歐の到来を溯及的に見詰めるモチーフが生じた。それが『神神の微笑』の成立である。笠井秋生氏は「この末尾の一節にキリシタン時代と近代とを結びつける役割を持たせたのではなからうか。」と捉えている。この視点に同感である。

なぜそのようなモチーフに到ったのか。『神神の微笑』では神の変容——文明の変容——の問題のみが語られているが、既に大正八年に書かれた『開化の良人』では、銅版画を見てへ一種の和洋折衷が、明治初期の芸術に特有な、美しい調和を示している。と語る条りがある。この作品は、近代化されてむき出しにされたエゴイズムを不均衡であると、情調的、美的感性の視点から押さえていた。芥川の脳裡には西歐の文明と東洋の文明の差違の問題が持続的にあつた。つまり西歐においては神という「絶対者の存在」が個の意識と行動に実在するので、人間主体に考える近代の文明は宗教と密接に関わる。しかし日本の汎神論では、個のうちに絶対者はあり得ない。絶えず問いかけ、問いかけられ、律せられるもののない個は、人間主体に考えると、自己に下降して我執と変り易い。そのようなこの国の現実を芥川は直視していたと思う。

「神神の微笑」に言及して「長崎小品」を無視するのは片手落ちであるといったのは三好行雄氏であつた。三好氏は「神神の微笑」の疑問、デウスが勝つかオオヒルメムチが勝つかとい

うあのアポリアに、芥川龍之介自身がひとつの解答をあたえているからである。」とし、芥川のあたえた解答として「かれはいぜんとして、同化し変容する日本の神々を信じている。西洋文明の命の火は司馬江漢のえがく蘭人の胸のなかに、日本の風土との微妙な一体化を遂げて生きるのである。あたかも大川にみいる青年の感性に、ダヌンチヨと黙阿弥とが等価で領略されたように。」と説明している。

「長崎小品」は大正十一年六月四日「サンデー毎日」に載つた小品で、蒐集されて戸棚に並べられた美術品や工芸品の中に描かれている人物が口を利き出す、戯曲風の一編である。司馬江漢筆の蘭人が、阿蘭陀製の皿に描かれた女に恋をして苦しんでいるのを、それに同情した古伊万里の茶碗に描かれた甲比丹や鹿皮の鸚鵡や小柄の伴天連や、牙彫の基督や麻利耶観音が女に蘭人の恋を伝えてとりもとうとする。女はそれを拒絶する。生粹のオランダ生れの女にとつて、日本製のそれらの人物たちは、オランダ人といつても日本人とも西洋人ともつかない、黒ん坊より気味の悪いものだったのである。あなたたちとわたしとは生れも育ちも違う、刀の鏝にいる天使さえ口を利いて貰いますまいというのが女の返事だつた。蘭人は泣いて、甲比丹や亀山焼の南蛮女に慰められる。そこへ蒐集主である主人が客とともに入って来て、江漢の蘭人や亀山焼の南蛮女を賞め、南蛮女は皿の阿蘭陀女より美しいといい、阿蘭陀女は涙を流す。主人と客は、へ日本出来の南蛮物には西洋出来の物にない、独得な

味がありますね。〽其処が日本なのでせう。〽其処から今日の文明も生れて来た。将来はもつと偉大なものが生れるでせう。〽と話す。基督や麻利耶観音は笑つたように見えたというのがだいたいの筋である。ここから明らかなように、移入された西洋の文物を、日本の感受性で受け入れたところから新しい文明が生れたということである。『神神の微笑』で〈造り変へる力〉の發揮が日本の今日の文明を成したということと通徹する内容である。唯『神神の微笑』では日本人の精神構造に〈本地垂迹の教〉を生むような精神の働きの根底的にあつて異文化を造り変へる作用をするという分けいつた捉え方をしているのに対し、この小品では垂直的な思考はせず、西洋のもののみが貴いとする阿蘭陀女と、日本的なものが加つたものが味があるとすると主人や客たちの意見を平板的に捉えてセリフ劇としたにすぎない。

この二作品から読みとれることは、わが国の文明の固有性についての考察と、〈自然〉や〈陶器〉の色彩りの美しさに讚歎する美的感性である。破壊する力をもたない生活意識は晩年『河童』で描いた近代教の旺盛に生きるいのちにはならない、山川草木に神が宿る汎神論的な共同意識のなかで、〈造り変へて心を和するこの国の感性と思想から生じる認識は美的情調に傾斜してゆく、そういうフェイタルなものはこの国の風土と密着させて示していると思う。『長崎小品』で阿蘭陀の女は〈中中氣位が高〉く、伴天連にも〈阿蘭陀生れだけに、あの女の横柄なの

は評判だ〽とみられている。換言すれば自我の強い女とされる。その阿蘭陀の女に麻利耶観音は、〈あの方も(司馬江漢筆の蘭人を指す、菊地)あなたと同じやうに、西洋文明の命の火を胸の中に宿してゐるのですもの。云はば兄弟のやうなものではありませんか?〽と誘うが、阿蘭陀の女は、〈造り変へられた蘭人をへこの国の画描きの拵へた、黒ん坊よりも気味の悪い人〽と、西洋の眼から断言する。この阿蘭陀女の勁い自我と〈破壊する力〉を重ねて、さらに〈新たに水平へ現れた、我我の黒船の石火矢の音は、必古めかしい君等の夢を破る時があるに違ひない〉の西洋の眼を置くことで西洋を見据えている。

しかし一方、先にも触れたが、亀山焼の南蛮女は〈余程美人〉と客の一人にいわせている。日本人の手で造られた南蛮女である。しかも阿蘭陀女を捉えて〈高慢な人です事〉という南蛮女は、これからはあの女の代りに私が蘭人の世話をしてあげるといふ優しい情をもつものとして描かれている。西洋の日本化した女の美しさの強調ともとれる。末尾の方で阿蘭陀女の血が濡れている。客の一人が〈まさか阿蘭陀の女が泣いたと云ふ訳でもありませんまい。〽という。気位の高く高慢な阿蘭陀の女と日本化した南蛮女の優しい情とを対照させて描く過程で検証すれば、阿蘭陀の女を忌避していることは明らかである。そこに作者芥川の観念をよみとることは可能である。主観を強調する意識に下降したエゴイズムを既に『藪の中』で見とつていた芥川は、高慢な阿蘭陀女のうちに自我と我執の絡まるさまを掴んで

いるといえる。既に近代を見て知っている芥川には、どのように誇りと他者との関与性を認識するか存在論の問題でもあったのである。

また、南蛮女の優しさを讃える眼は、日本家屋の白壁に石版刷の西洋女の画が調和している美しさを見る意識に通じる。既に述べたが、和洋折衷の銅版画の美を概歎した『開化の良人』の〈私〉の心と通徹する美の讃仰者をここにみる事が可能である。そのことは、日本の風土や伝統の中で〈造り変へ〉られた西洋の風物を不適合でない美的なものとして享けて視つめていくということになる。そうした視点が、『神神の微笑』と『長崎小品』にある。

宗教的信念よりも肉親愛の方が先行するということを描いた小説『おぎん』（中央公論）大正II・9）がある。おぎんはキリストを知らずに死んだ父母がいんへるのに堕ちているのをそのままにして私だけがはらいそにくわけにはいかないとして棄教する。そしておぎんの心は

この眼の奥に閃いてゐるのは、無邪気な童女の心ばかりではない。「流人となれるえわの子供」、あらゆる人間の心である。

と作者は説いている。〈天蓋のやうに枝を張つた、墓原の松を眺めて〉教えを棄てる決心がついたのであり、松の天蓋を日本のものの象徴と解すると、おぎんは殊勝な心をもつた日本の女ととれる。おぎんに次いでおすすめも転ぶが、おすすめは私がお供

をするのはへばらいそへ参りたいからではございません。唯あなたの——あなたのお供を致すのでございます。と夫婦の絆を訴えている。そして作品が昔ばなし風の語り口調で悪魔と天使とのたたかひに仕立てられ、人間の性から悪魔の勝利に終るといふことであるが、注目したいのは、親子三人が役人に縛られ代官の屋敷へ引き立てられる途中、祈りつづけている。そのさまをみて、

悪魔は彼等の捕はれたのを見ると、手を拍つて喜び笑つた。しかし彼等のけなげなさまには、少からず腹を立てたらしい。悪魔は一人になつた後、忌忌しさうに唾をするが早い、忽ち大きい石臼になつた。（傍点菊地）

とある。〈けなげなさま〉という表現からもうかがえるように、おぎんら三人の神に対する心は、信仰厚く神の教理を深く理解しているというより、人間のまことの心から出る信心であつたと読める。そして彼らは、悪魔の手引で転んだのではなく、そうしたまことの心の延長線で転んだのである。つまり悪魔の勝利ではないというのは人間的誠実さの勝利ということである。だから棄教を描きながら文末で〈悪魔の成功だつたかどうか、作者は甚だ懐疑的である。〉と作者は注をつけることにもなつてくる。三人を焼き殺すことにした代官は〈第一に法律があり、第二に人民の道徳があり〉と思つている、いわば世俗の常識の代表者であるとみれば、へ火のかかるのを、今か今かと待つてゐる見物人たちを無責任で人の苦しみを楽しむ大衆と捉えるこ

とができる。そうしたなかで、転びの奥に人間本来の性の尊さと純粋さを強調しているのがこの作だといえる。『おしの』（中央公論）大正12・4）ではキリストを軽蔑した武家の女を描いている。それは異文明に接触して却って武士的な自負心が現れたというところで、この国の人間を照らしたことになる。つまり『おぎん』『おしの』の二作品から窺えることはこの国の人間の優情の美しさの強調であり、人間性として堅固な意志を示していることであつた。そして少くともここでは芥川はこの国の伝統のうえに立つた感情移入をしている。中国旅行から帰つてからは、芥川は一層東洋的な趣味が加わつて陶器や画を見るようになったと下島勲が書いていたように思うが、東洋人としての自覚に立つた人間存在を考ふる氣持が強くなつていたようである。しかしどこかへ黒船の石火矢の音を胸の中に宿している芥川は存在している。『藪の中』や『河童』では近代という秩序の中での人間の存在の理由を根源的に考えようとしていることとわかる。

『神神の微笑』は、この国の、桜で象徴されるような美しい風土が生活意識を唯美的なものとし、それが精神にも作用して〈造り変へる力〉を形成し、西欧は情調の流れに吸収されて、西欧文明を思想化するというを生ぜしめなかつたことを描いていた。従つてこの国では美しさを愛する情調の表現が求められるのであつて、西洋の人間主体に考ふる文明とは径庭がある。その過程で人間性を問えば実存的な問題があるわけである。

近代を体験している芥川のは、伝統的な感覺に立つて西欧の人間主義をどう受け入れるか、問おうとしているのだ。

注

(1) 岩波版「芥川龍之介全集第五巻」の後記によると『上海遊記』は大正十年(一九二二)八月十七日から九月十二日まで二十一回にわたつて『大阪毎日新聞』(朝刊)及び『東京日日新聞』に連載された。『大阪毎日新聞』は八月二十四日、二十七日、二十八日、九月二日、五日、十日休載。『東京日日新聞』には八月二十日から掲載され、八月三十一日―九月二日、四日、十三日休載で十四日完結。のち『支那遊記』に取められた。とある。

(2) 筑摩版「芥川龍之介全集6」の解説。

(3) 齊藤阿具「西洋文化と日本」(昭和16・4・30、創元社)によると織田信長は「天正六年に荒木村重が伊丹の有岡城に拠つて信長に叛いた時に、信長は茨木・高槻の二城を攻めたが、俄に陥らない。そこで伴天連のオルガンチノ(Organino)をして、高槻城主の高山友祥に説いてこれを降参させたから、茨木城主の中川清秀も降り、これが為に村重を破ることができた。依つて信長は安土城下に会堂を建てた資金を給与した。」とある。またレオン・パジェス(日本切支丹宗門史上巻)クリセル神父校閱 吉田小五郎訳、岩波文庫、昭和14・11・10)によると慶長十四年(一六〇九)四月二十二日、長崎で逝去。イタリア人で七十九歳、四誓の誓願司祭で、日本滞在四十年に及び、此間殆ど京都の長老を勤めて来たとしてある。

(4) 笠井秋生氏「神神の微笑」について(『信州白樺 芥川龍之介特集』昭和57・2)で「破壊する力」が、キリスト教の持つ宗教的非寛容を意味していることは言うまでもない。シンクレイズム混合信仰を拒否する激しい姿勢である。造り変へる力」を受動的、保守的な精神だとすれば、「破壊する力」は闘闘的、改革的な精神である」と述べている。

(5) 第六短篇小説集「春服」、大正十二年五月十八日、春陽堂。

(6) 「神々の微笑」の意味」(『日本近代文学大系、月報4』角川書店昭和45・2)

(7) 三好行雄氏は「芥川龍之介論」(昭和51・9・30、筑摩書房)で「形式論理的には、小説の最終の段落は、日本へ同化したオルガンテイノへの西洋からの呼びかけということになる。《我々の事業》はすなわち西洋の事業にほかならない。黒船という言葉のほんらいの字義どおりに、龍之介は、たとえば嘉永六年に浦賀沖にあらわれたペリーの恫喝にはじまり、やがて明治維新の起動をうながした西洋文明の第二のインパクトについて語ったのである。」という。

(8) 注4と同じ。引用のした文のあとに「西洋との最初の接触を持ったキリシタン時代の宣教師(オルガンテイノ)のかかえこんだ問題は、西洋との第二の接触を持った近代の芥川がかかえこんだそれでもあった。おそらく、このことをさりげなく示すために末尾の一節は用意されたであろう。」がつづいている。

(9) 注7と同じ。